

京都保護観察所長賞

認めあう事の大切さ

京都市立朱雀第二小学校 六年 松井 彩空乃

社会を明るくするために私達は「個性を認め相手の事を理解する事」が大切だと考えます。

私は生まれつき「白斑」と「吃音」をもっています。白斑とは医学的には「尋常性白斑」といい皮膚の一部の色が抜けて小ささまざまな白い斑点ができる病気です。皮膚の内側にはメラノサイトという色素細胞があり、紫外線を吸収するメラニン色素が何らかの原因でメラニン細胞が減ったり消失したりする事で発症します。次に吃音とは話す際に音や音節言葉が途切れたり繰り返したりする言語障害です。吃音症、小児期発症流暢障害とも呼ばれます。百人のうち約五〜八人の発症率です。私の場合は、苦手な行の言葉を言わないといけない時や緊張や不安な時に出てしまう事が多いです。話してもどり白斑は治らない、治りにくい病気なので減る事がない非常に厄介な病気です。割合は最大で二%でもものすごく高い率ですが、死に至る病気でないで、有効的な治療法がなく「酷な病気」と思う人も多いそうです。そんな二つの病気をもっていたがあまり気にしていませんでした。しかし、小学二年生になった時、なぜ知ったのかは今だに分かりませんが、話した事のないとなりのクラスの男子二人に私の苦手な行、あ行、は行をいえと突然言われ行って吃音が出ると笑われるという事が数週間続き、白斑もバカにされました。でもだれにも相談できず、人と話す事が怖くなり目元を隠すため前髪をおろしマスクをしていましたが、がまんできなくなり先生に言って解決してもらいましたがやっぱり怖くて前髪をおろしマスクをしていました。でも小学三年生の後半ぐらいに出きた友達になんてそんな顔をかくすのと聞かれ軽く説明すると、まるで白黒だっ

た世界に色が付いていったような感覚になりました。その言葉は、「そんな事気にしなくていいってーそんなの気にせず自信もー！せつかわい顔してるんだから。それも個性だって！」と云ってくれました。その次の日、私にかわいいヘアピンをプレゼントしてくれました。それからヘアピンは宝物です。そしてその子は、心の暗闇のどん底に落ちた私を助けてくれて私よりも今ほしい言葉をしていてびっくりしました。このように吃音などで悩んでいる人はたくさんいます。その子とは今も大切な友達です。これからも助け合いたいし、もしこまっていたりなどをしていたら、こんどは私がすくってあげたいなと思っています。小学三年生から少しでもスラスラ話せるように「言葉と聞こえの教室」にかよい始めました。そこには自分と同じ吃音をもった人がいました。少しは人前で話すのも平気になってきました。吃音は大人になるとなる人もいれば、なおらない人もいます。白斑も治らない、治りにくいですがそれをせめずにそれも自分の個性だと認めて「認めてもらっていきたい」と思って自信をもっています。私の場合は、「吃音」も「白斑」も生まれつきもっています。しかし、ある日突然発症する時もあります。生まれつきではないときの原因は、吃音の場合、約四個あります。まず一つ目は、「体質的要因」。子ども自身が持っている吃音になりやすい体質の事です。舌や喉などの器官には問題なく「脳の機能と構造の違い」だと考えられています。二つ目は、「環境的要因」。さまざまな物があり明確には分かっています。さまざまな環境的要因に本人の体質がからみあう事で発症します。三つ目は、「獲得性神経原性吃音」。脳の損傷にともなって発症します。後天性の脳損傷によるものです。脳血管障害での発症が多いとされているが、神経変性疾患、脳腫瘍、脳外傷などでも報告されています。最後の四つ目は、「獲得性心因性吃音」。心理的なストレスや、外傷体験が原因となって発症します。神経学的問題が見つからず、獲得性心因性吃音と診断された場合には発症となった心的外傷の影響などを精神

科医が診察するそうです。白斑は、複数の原因が関係しており、完全には解明されていません。しかし以下の原因が関与していると考えられています。「自己免疫の異常」や「遺伝的素因」「精神的ストレスや皮膚への刺激」です。この三つが主な原因だと考えられているそうです。

個性を「認める」「認めてもらえる」というのは病気や障害などを持つている人からすると、とても大きな救いになる事があります。もちろん孤独さや惨めさを感じる事もあります。でもその事を認めてくれて私は救われました。その子には約四年たった今でも感謝しています。私達は皆と違つからなどのどんな理由があろうと差別などを無くし、認めあつ事でみんな笑顔で楽しく過ごせる「明るい社会」が出来上がっていくと思っています。

審査員からのメッセージ

ご自分の辛い経験を救ってくれた友達に感謝するとともに、そのときのことを忘れず、友達が困ったときがあれば今後は自分が救いたいとの想いに、相手を理解することで生まれる強い絆を感じました。

相手を認め大切にして認めることで、自分も大切にされて認められる。そんな絆が増えることで、たくさんの人と心がつながっていく。この積み重ねが明るい社会の実現につながる、そう感じました。



京都保護観察所長賞

違いを認め合える社会に

京都市立四条中学校 三年 谷内 涼月

人は誰一人として、全く同じではない。性格、考え方、育ってきた環境、得意なことや苦手なこと、外見や話し方など人間は、それぞれ異なる特徴を持っている。だからこそ世界は面白いのだと思う。しかし現実には、その「違い」が原因でいじめや差別が起きたり、仲間外れにされたりすることも少なくない。

今の世界は身近なところに外国のルーツを持つ人がいる。私もその一人で、日本と、アジアの国にルーツを持っている。六歳のときに日本へ移住し、小学校に通っていたが、初めは日本語に馴染むことができずにいた。熱心に日本語を学んで、すぐにみんなと大差なく話すようになったが、もともと話していた言葉を忘れてしまった。そのまま中学生になり、新しい友達ができた。その友達に、実は外国にルーツを持っているということを言ってみた。すると、一部の友達は、その国の言葉を話せないのかと残念そうにしている、私は少し悲しくなった。今も、ふざけて〇〇人と呼ばれることがあり、煩わしく思っている。しかし他の友達は、国際的な家庭でうらやましいなど言ってくれた。うれしくなった私は、もっとその国の文化を大切にしようと思い、忘れてしまったその国の言葉をもう一度学び直すようになった。その姿を見て、親も喜んでよく様々なことを教えてくれた。そうして私は、「違い」を尊重し合うことで、悩んでいる人が減り、みんな楽しく生活できる、つまり、「違い」は壁ではなく、世界を広げるための扉なのだと感じた。

現代の日本社会では、少数派の人たちが生きづらさを感じる場面が多く存在する。外国にルーツを持つ人、体に不自由のある人、LGBTQ+の人、家庭の事情で悩んでいる人など、多様な背景を持つ

人たちが無意識の偏見や差別的な言動によって傷つけられてしまうことがある。しかし、私たちの一人ひとりが「違い」を理解しようとする姿勢を持つことができれば、社会は確実に今よりもやさしくて明るいものへと変わっていくけると私は信じている。

私たちにできることは、けっして大きなことばかりではない。困っている人に声をかけてみる。誰かのちょっとした違いをからかわずに受け入れる。「それは違う」と感じたとしても、まずは相手の話に耳を傾けてみる。そのような日常の中の小さな行動が、少しずつ社会を変えていくための力となるのではないだろうか。

「違いを認め合える社会」とは、ただ我慢して受け入れる社会ではない。相手の立場や背景を知ろうとしながら、その中に存在している価値を見出していく社会である。誰かの「違い」を理解しようとすることは、自分自身の視野を広げることにつながる。そして、その人との関係の中で、自分自身も「自分らしくいてもよい」と思えるようになるのではないだろうか。人は一人では生きていくことが不可能である。支え合うことによってこそ、安心して暮らせる社会が生まれるのだと私は考える。

これからの社会を担っていくのは、私たち若い世代である。学校、家庭、地域など、身近な場所から「違い」を大切にし、認め合う行動を始めることが、社会全体を明るくする第一歩であると考えている。私は、まず自分の身の回りの人に思いやりをもって接し、その人の「違い」を見つきたい。また、困っているのであれば、自分にできることから少しずつ行動していきたい。そして、すべての人が自分らしく笑顔でいられる、そんな社会を目指して、これから前向きに歩んでいくつもりである。皆さんも、社会を明るくするために、違いを認め合える社会を作るために、何かできることを考えてみてはいかがだろうか。



審査員からのメッセージ

違いがある相手は自分にはないものをもっている、互いにその違いを尊重しあうことでみんなが楽しく生活できる社会になる、誰かの違いを理解することは自分自身の視野を広げるといった想いに強く共感を覚えました。

違いを認め、相手の立場や背景を知ろうとすることで、その中に存在する価値、すなわち相手の大切さや素晴らしさに気づくことができるでしょう。お互いを尊重することができる社会はきっとやさしくて明るいものになる、改めてそう思いました。

